第 11 回全国フォーラム、東京湾文化体験エコツアーレポート

第 11 回　全国フォーラム担当理事　森川　雅行

1 月 21 日に東京海洋大学で開催された全国フォーラムと翌 22 日の東京湾文化体験エコツアーの速報レポートです。詳細は、後日 CNAC の HP にアップされます。

NPO 法人「海に学ぶ体験活動協議会(CNAC)」の第 11 回全国フォーラムが「自然体験活動の醍醐味～海の底力をはかる～」をテーマに約 60 名の参加を得て東京都港区の東京海洋大学品川キャンパスで開催されました。フォーラムでは、基調講演、NPO 等による三つの活動事例報告、パネルディスカッションが行われました。

【主催者、来賓挨拶】

フォーラム冒頭、主催者挨拶として、三好 利和 CNAC 代表理事からは、「CNAC は活動 11 年目を迎え、

平成 27 年度までの「三つの広げよう運動」に続き、今年度から「実践する CNAC 三か年計画」に取り組んでいるところ。今まで、取り組みが十分でなかった環境分野において、「海辺の環境教育プログラムレシピ集」を作成し、配布する予定。みなさまの活動に役立ててほしい。先日、小笠原を訪れる機会があり、多くの若者を目にし、人と海とのかかわりを実感。本日のフォーラムテーマは、「海の底力」であり、海の大きな力の再認識、海と触れることによる学びを皆さんと共有したい。闊達な意見交換を期待」との主催者挨拶がありました。

続いて、国土交通省港湾局佐々木宏海洋・環境課長からは「昨年の館山でのフォーラムでは、着任早々参加させていただき、地に足がついたユニークな取り組みなどに感銘を受けた。昨日、国会が開幕、トランプ大統領の就任があったが、地方創生が大きなキーワード。「未来は予測できないが、変えることができる」に示されるように創意工夫のある取り組みが地方を活性化、創生させる。国交省の取り組みとして、昨年 9.8 万人が集まった

東京湾大感謝祭や横浜でのアマモ場再生の取組、全国各地の直轄港湾事務所では海辺の自然学校を開催。多様な主体との連携がキーワード。行政や民間、環境の専門家、NPO、学校関係者らとタッグを組んで豊な海への関心を高め、豊かな海を次世代へ継承したい」との来賓挨拶がありました。

引き続き、一般財団法人みなと総合研究財団の鬼頭平三理事長から「財団の中に CNAC 事務局を設置。平成 23 年の法人改革で

財団を衣替え、行政の課題解決のシンクタンクの機能および民間と NPO の橋渡し事業に力を傾注しており、CNAC の活動を全面的に支援。昨年暮れに、我が国の出生者が 98 万人と 100 万人を切った。また、全国都市交通特性調査によると、1 日の外出割合が過去 30 年間で最低となり、20 代の方が 70 代の方より外出しないといったデータもある。このようなことが、若者の海離れに拍車をかけており、海で遊ぶ楽しさを広めることに積極的に取り組んでいく」とのご挨拶をいただきました。

【全国フォーラム基調講演】

古川 恵太様（笹川平和財団海洋政策研究所 海洋研究調査部長兼主任研究員）に、基調講演として「海の恵みに支えられて」をテーマにご講演いただきました。基調講演では、「海の底力」の考察から始まり、底力を恵みと考え、その恵みはどこからきているか？恵みは生態系サービスにより享受されており、生物の多様性（みんな違ってみんないい）が人の幸せにつながる。生態系サービスは自然、社会的影響を受け、それぞれを測り、その関係を把握し、幸せになるためには行動につなげていくことが重要。

陸では空気が動き、海では水が動く。その特性の差を理解することが重要。京浜運河の流速測定やカニ護岸、東京湾のハゼ釣り、お台場の海苔づくり、高島水際線公園（横浜港）の事例紹介を通じて、事前、事後をしっかり測り、参加者（子どもたち）自身がしっかり考え、思いを他所にめぐらせ、背後の人などとの連携を広げていくことで、底力となる。

海の恵みは、自然の関わり【水が動くこと、生息場が多様であること】と人の関わりによってもたらされ、それらをしっかり測ることにより、次の行動につなげていくことが自然体験活動の醍醐味である。とのお話をいただきました。

【活動事例報告】

嶋村 泰輝様（勝島運河倶楽部 理事兼事務局）からは、「都会の水辺で遊ぶ、学ぶ、育てる」と題して、勝島運河を舞台に展開している活動の話をいただきました。2005 年から「大人が真剣に遊ぶ」（自然とルール・マナーはついてくる）をモットーに運動を始めた。護岸の土手に菜の花を植え、社会実験として浮桟橋の設置、10 人乗りボートの運行等の取り組みや長野県の小学生や外国からの交換留学生との幅広い交流を紹介していただくとともに、蝶の道プロジェクトやカヌーで将来のオリンピック選手を目指す少年の紹介など、遊ぶだけでなく、学ぶ、育てる面からも貴重な話をいただきました。スクリーンに映し出される船上の子供たちの瞳の輝きが印象的でした。

小正 和彦氏（横浜市立幸ヶ谷小学校 校長）からは、「ユネスコスクール・ESD の視点をもった総合的な学習の時間」と題して、2011 年から着任指導されているユネスコスクールである幸ヶ谷小学校での ESD(Education for Sustainable Development)の取り組みを紹介していただきました。ESD への取り組みには、17 の持続可能な開発目標（SDGs）があり、生活科・横浜の時間を使って学級ごとに ESD の視点をもったテーマに 1 年を通して取り組む。具体的なクラスの学習例の紹介がありましたが、いずれも子どもたちの学習が、地域活動への参画、意識・価値観の変容、フォーラムへの参加や現場の海を再現する海水槽の設置などの主体的な行動に変化していくことに感心するとともに、指導される先生方の熱心さが伝わってきました。

水澤 豊子氏（独立行政法人国立青少年教育振興機構 国立沖縄青少年交流の家 次長）は、「マリンブルーとかしき～渡嘉敷島で海から学ぶ～」と題して、国立青少年教育振興機構の紹介、渡嘉敷島の青少年交流の家で繰り広げられている海洋教育の取り組みなどについて紹介していただきました。離島ゆえの船の欠航リスクや指導員、監視員などの人員不足が悩みである国立公園での自然体験活動は始まったばかりで決まりのない状態、海系の施設で連携をはかり、ルールを決めていきたい。海があまりにもきれいなので、体験するだけで満足してしまう面が悩みということでしたが、映像を見た参加者一同は贅沢だなと思ったのでないかと感じました。

続いて、本日の会場の東京海洋大学の教授で、CNAC の理事でもある千足 耕一氏をコーディネーターに、活動事例報告者 3 名と三好 利和 CNAC 代表理事をパネラーとして、パネルディスカッション「海の底力に想いを巡らす」が行われました。主に、自然体験活動を通じた子供たちの変容や活動実施のための連携が議論されました。

【パネルディスカッション】

冒頭、千足コーディネーターから、大学での授業や遠泳などの海洋実習の紹介があり、その後、自身の海辺（水辺）の自然体験活動の価値―体験したことは理解する―を披露され、パネルの討議・質疑応答に入りました。※会場の質問（活動事例報告含む）は、あらかじめ質問票により聴取。

■子どもの変容

※会場から「自然体験活動を通して子どもたちがどう変わったかを伝えることが重要。変わった効果を測定、定量的に調べているのか？」

（小正氏）子どもの変容はポイントであるが、測定は難しい。価値観、行動基準などに照らすのでなく、どう行動するかが重要。1 年から 6 年になれば、経験の積み重ねができ、自身のとらえ方が変わってくる。ガイドブックを作成し、地域へ想いを伝え、これからこうしたいと自らプライドを持つようになる。

（水澤氏）感想文を書かせるとこう書いたら喜ぶかなと思う子がいる。指導者の引き出し方がポイント。誘発できればいいと思う。

（嶋村氏）失敗例は、船を作る合宿に息子を連れて行ったところ、海嫌いになった。成功例は、カヌーでオリンピック選手を目指す子がでてきた。指導者は、口にチャックをしてあまり言わないことだと思う。引き出すことは難しい。

※引き出すことに関して

（小正氏）海が嫌いになったことは一つの成果。それでもかまわない。ESD では、より良いクラス、学校、地区にしようと持続可能に取り組む。自分でやることの意味を感じる。これは褒めることと違う。自分が学んでいることに対してプライドを本人が持つようになる。5, 6 月にクラスの ESD のテーマ決めでは大変盛り上がる。

※会場から「失敗例、その裏側は」

（嶋村氏）失敗か否かは後でわかる。次につながればいい。事故を起こしていない。安全に一番注意している。今までの活動で海に落ちたのは 5 人。すべてスタッフ。

（小正氏）海洋冒険家の白石康次郎氏が、90 日間の世界一周レースに参加しているとき、スカイプで洋上とつなげて子どもたちと学習をした。その二日後、艇が壊れ、白石氏はレースから撤退するが、子ども達の呼びかけは初めのがんばれからお疲れ様などのねぎらいに変わり、それなりに判断力がある。失敗、成功のボーダーは少しのアドバイスかもしれない。

（水澤氏）海嫌いになっても仕方ないが、次回やってもいいかの余地を残すことは重要。好きか嫌いかというより、苦手だな、次はチャレンジしようという姿勢。

（三好氏）最初のステップとして安全。海での事故は死につながる。失敗してはならないミッション。体験学習は、日帰り、宿泊があるが、数時間ではこれらのことは伝わらない。一回限りでは難しいと思う。

■連携とは

（千足コーディネーター）どのように様々な連携を取るか？その肝は？

（嶋村氏）肝は人。これを超えるものはない。運河倶楽部の活動は、おやじの会がバックボーンにあり。5年 10 年ほぼ手弁当で続けてこられたのは、人をつなげてきたからこそ。

（小正氏）次期学習指導要領は、これまでのものと違い、数年間検討経過を小出しにしている。キーワードとして、「社会に開かれた教育課程」で、学校だけでは教育は成り立たない。学校の為に地域支援サポートが必要。

（水澤氏）人と会って飲む。

（三好氏）役所との関係が重要。まちづくり協議会と区役所が協力してガイドラインを作成してきた。このいい関係が最近若い人で切れつつある気がする。

インストラクターがガイド役としてこのノウハウを地域とともに広げることが必要。認可、助成金の獲得等うまくいく。

※若い人に関して

（嶋村氏）品川、地元の河童祭り。盛り上がりがすごい。神輿担ぎに新しい人多し。彼らは、ポテンシャル高く、背後に三万人。如何にスピンアウトさせて地元意識をどう作っていくかが大事。

（古川氏）連携は越えていかなければならない壁。芝浦の例では、護岸、水たまりは都の管轄、歩道は、区の管轄、地元の NPO による海づくり、誰一人欠けても進まない。関係者の連携があって前へ進む。連携することが目的では長続きしない。目的があって連携が意味を成す。しかし、固定化すると新しい人へのハードルとなる可能性あり。自立的活動とするためには、新しい人が入る余地を残すのが次の課題。

最後、千足コーディネーターからは、海でしかできないことの奥深さを感じた。これからも CNAC は、海辺の自然体験活動の普及に努めていく決意表明があり、シンポジウムは閉幕しました。

【閉会挨拶】

急遽駆けつけていただいた東京都港湾局の竹村 淳一計画調整担当部長から「都は都民の皆様が水辺を楽しめるよう、護岸等の場の整備と 10 年前から始まった運河ルネッサンス等のソフトの取り組みを進めている。本日のテーマの一つである「測る」は、基準を満足した、しないと使われることが多く、結果が見えにくい。これらの観測値に対して、科学的アプローチをして、学びを活動にかえ、地域がより実り、豊かになることが重要。都は今

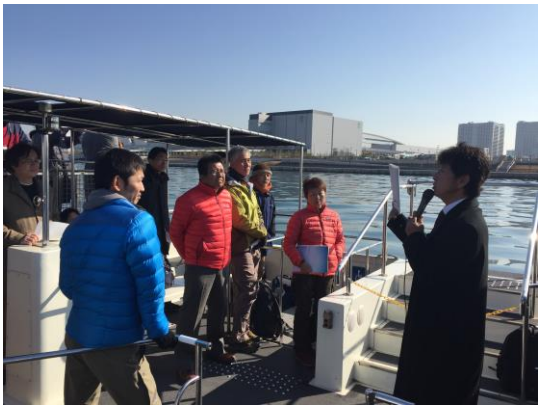
日より明日をめざし、取り組みを進めていく所存」とのご挨拶をいただきました。

最後に、フォーラムの閉会にあたり、小池 潔 CNAC 副代表理事から「今日のフォーラムでいろいろな海の活動を報告していただき改めて海の多様性を実感。海離れが言われる中、海辺の活動のフィールドが消滅してしまうのではないかと危惧していたが、都市部で安全に配慮し取り組みが展開されてきており安心。体験学習の機会の均等化は、学校中心になり、本日の横浜の小学校の取り組みは示唆に富んだもの。CNAC の全国フォーラムも 11 回目、3 年ぶりの東京開催ですが、CNAC 創設時の情熱、使命感を忘れることなく活動に取り組む所存。昼間のオフィシャルの活動に加え、夜のコミュニケーションも重要。時間の許す方はぜひこの後の交流会にもご参加を」との閉会挨拶の後、参加者全員で CNAC の旗を囲んで記念写真を撮り、参加者はそれぞれ多くの気付きを得て、今年の全国フォーラムは幕を閉じました。

【交流会】

その後、品川駅港南口のわらやき屋品川で、約 30 名の参加を得て交流会が開催されました。冒頭、CNAC 副代表理事 神保 清司氏の乾杯を皮切りに、カツオのわらやきたたき等の土佐料理を肴に高知の地酒や焼酎で交流会は盛り上がりました。楽しかった時間はあっという間に過ぎ、いつもの中島 正雄 CNAC 事務局長の中締めで、交流会はお開きとなりました。引き続き、居酒屋等で各自、品川の夜を楽しんだようです…。

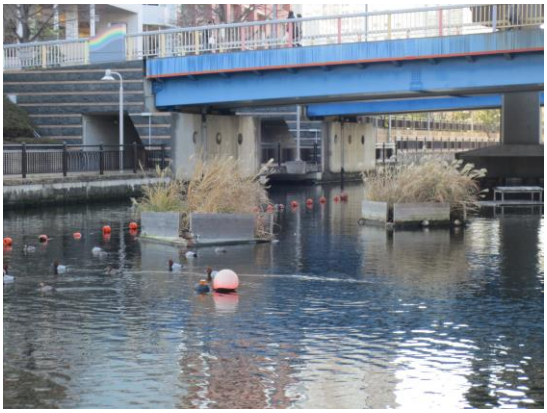
【東京湾文化体験エコツアー】



翌日の 1 月 22 日は、「東京湾文化体験エコツアー」が開催されました。当日は、天候が心配されましたが、前日の風がおさまり、絶好のクルーズ日和となりました。フォーラム参加者に加え、ツアーだけの参加者もおられ、船の定員に近い約 30 名の皆様が参加されました。

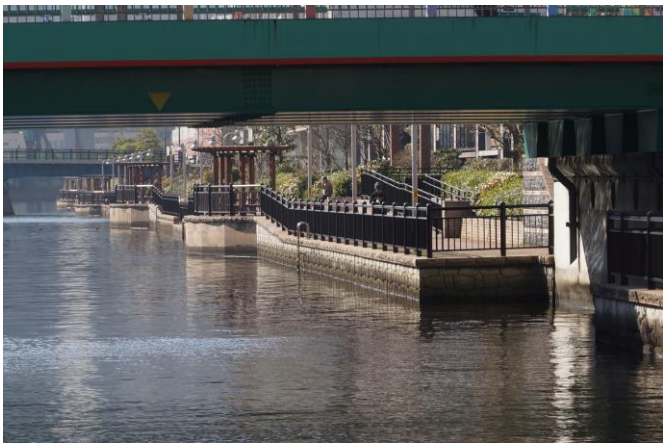
JR 田町駅に 10:00 集合し、歩いて 10 分ほどの芝浦アイランドのエアテラスへ移動。そこで、ツアーの講師をお願いして

いる認定特定非営利活動法人海塾 顧問の榎本 茂氏と合流。民間施設の下にあるカヌー置き場を見学した後、乗船。船は、普段定期運航されているアーバンランチ（Urban Launch）をチャーターし、90 分間の都心ウォーターフロントのクルーズです。



ルートは、芝浦アイランド桟橋→カルガモの人工巣→芝浦西運河→カニ護岸→芝浦下水処理場新ポンプ場建設現場→高浜水門→レインボーブリッジ→晴海選手村建設予定地→豊洲新市場→第六台場→フジテレビ→京浜運河→天王洲ウォーターフロント→京浜運河、芝浦アイランドふ頭。わくわくするコースに加え、10 年来、地元で水辺の活動に取り組んでいる榎本氏の解説付き。若干辛口のコメントや初めて聞く目からうろこの話もあり、参加者ご満悦のうちにあっという間にクルーズ終了。

参加して個人的に感じたことは、①圧倒的なウォーターフロントのマンション群やレインボーブリッジの景観 ②水面に目をやると多くの水鳥がいて、自然豊かなこと。特にカルガモの人工巣では、わずかに自然を残すだけでたくましく繁殖する姿に感銘 ③生物の営みを大きく作用する東京湾奥部の水質に関して、下水処理水が大きなウエイトを占めること。現在、3 日に 1 度、簡易処理で放水されており問題。下水の貯留施設の整備や放流口を沖に出すなどの対応実施 ④防災面に関しては。高層マンションは災害時 7 日間の備蓄を義務付（住民は基本的に外に出ずに屋内待機）されているが、非常電源はもたず、電力供給が課題。発電機燃料用の C 重油調達のため、タンカーが着船できる桟橋施設を設置。地権者の 8 割の同意必要など制約、多目的、共同利用が認められない規制 ⑤天王洲アイルの寺田倉庫のカフェや文化施設（テラトリア）、高層マンション群のベルギー製の煉瓦を使った中護岸など、紆余曲折を経て実現している官民連携を経て実現したウォーターフロントの素晴らしさ。



【振り返り】

あっという間のクルーズを終えて、再び田町駅のレストランへ移動。駅前のレストランでおいしそうな魚料理を前にして、本日の活動の振り返り第一部。

多忙中出席いただいた榎本氏をまじえて、東京湾のビオトープの現状、高層マンションへの下水処理施設設置の義務付け、規制緩和の問題点、シーカヤックの漕艇庫などに関して質疑応答がなされた。

魚料理をおいしくいただいた後、振り返り二部として、参加者一人一人から本日の感想を発表していただき、解散しました。

・G7 の首都で海をもっているのは東京だけ。水辺を大事にすべき

・山を主とした活動をしているが、水辺の取り組みを参考にしたい

・実際の海上に出てみると思ってたよりきれい

・官民連携の未来志向の取り組みは大変参考になる

・今回の参加費 3,000 円は、内容に比べて安い

解散後、さらに元気な 9 名は天王洲アイルまで散策したそうです。

【担当理事としての感想】

三年間の全国フォーラムの地方開催（平成 25 年度は横浜市、26 年度は豊橋市、27 年度は館山市）を経て、再び東京海洋大学品川キャンパスで開催しました。ほぼ会場を埋めた参加者は途中帰られる方もほとんどなく最後まで熱心な議論が繰り広げられました。また、翌日の東京湾文化体験エコツアーには全国各地から定員いっぱいの方に参加していただくとともに、多くの方に最後の振り返りの貴重な感想発表までいただき心から感謝申し上げます。

東京開催に当たり、基調講演や活動報告していただいた皆様、会場を提供していただいた東京海洋大学の皆様、国土交通省、東京都港湾局をはじめとする関係者の皆様に深く感謝いたします。また、東京湾文化体験エコツアーで大変お世話になった海塾顧問の榎本様には重ねて感謝申し上げます。

最後に、二日間にわたる私なりの総括で締めさせていただきたいと思います。皆様、ありがとうございました。

【フォーラム総括】

現状を測る。レポートを作成する。そこから自ら考え、行動する。これが自然体験学習の醍醐味。それを見守る海の底力。CNAC は、これからも引き続き海辺の体験学習の普及目指して、頑張ります！

(文責　森川　雅行、写真　港　絢子)